

第9回「日本語大賞」

テーマ「ちょっと気になる日本語」

中学生の部 優秀賞 受賞作品

「空気を読む」とは、何だろう

ベルギー

ブラッセル日本人学校

1年 徳田 朱香

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

「空気を読む」とは、何だろう

ブラッセル日本人学校 一年

徳田 朱香

私は、中学一年生が十七名と、少人数の学校に通っている。クラス替えもなく、転入、転校も多々あることから、皆とても仲良しで、笑いの絶えない楽しい学校生活を送っている。

そんな仲の良いクラスでも、時々耳にする言葉がある。

「あいつ、本当に空気が読めないな。」

「KYだよ。」

「空気読んでよ。」

自分の意に沿わない事やクラスの多数の思いと違う事を言ったり、勝手な行動を取ったりすると、こんな言葉が出る。人は一人一人違う考えを持っているから、意見が違う事はおかしくはないと思う。

私もつい使ってしまう事がある。クラスの友達のことをきかれて、何と答えて良いかわからない時、

「私、空気読めないから、よく分からない。」と。答えに困った時に、言い訳に使える便利な言葉でもある。

「空気を読む」とは、どんな意味なのだろう。国語辞典で調べると、勿論そんな言葉は出て来ない。「空気」で調べると、地球を包んでいる、色にもおいてもなく、味もしない透明な気体という意味の他に、その場の様子、雰囲気とある。つまり、「空気を読む」「空気が読めない」は、その場の雰囲気から状況を推察できるか、否かという事だ。その場で自分が何をすべきか、相手のして欲しい事、して欲しくない事を考える事が出来ない人は、「空気が読めない」と言われてしまう。

では、「空気を読む」力は、必要なのだろうか。インターネットで、この言葉を調べたら、コミュニケーション力を磨き、空気を読む力をつけようと書かれているウェブサイトが探し出され、空気を読むためには、相手の分かりにくい情報を読み取って、その場に合うよう正確に行動していかなければならないと書いてある。こんなページがあるという事は、空気を読む力を身につける事が私達にとって必要だという事なのだろうか。

でも、母は、

「空気なんて読まなくて良い。困った時、自分を助けてくれるのは自分自身しかない。皆に合わせたって、誰も助けてくれないよ。その場の雰囲気に合わせて、流されるのではなく、自分が正しいと思う行動をしろ。」

と、よく私に言う。それは、いつも友達に遠慮して、

「どっちでも良いよ。」

と言ってしまふ私の性格を知っているからだと思う。相手の発言の背景を考えると、自分本位の発言はできないし、どうしても友達に嫌われたくないという思いもあって、なかなか自分の主張を押し通そうという気にはなれない。

そして、父がいつも私に言う。

「人としての当たり前前の礼儀や気遣いを忘れてはいけないよ。」

と。私はいつも自分の事より友達の事を考えてしまいがちだ。それは相手への思いやりや気

遣いからであって、その場の雰囲気に合わせているのではない。

人としての当たり前の礼儀、気遣いは大切な事だ。だから、いつでも相手への思いやりや気遣いが出来る人でありたいと思う。でもその場の雰囲気に合わせて、自分の意見が言えない人にはなりたくない。私を含めて多くの人が、「礼儀をわきまえる」「気遣いができる」と「空気を讀む」を同じ意味合いで使っているのではないか。そこには大きな壁があり、主体性のあるものとなないものという違いがある。「空気を讀む」は、何て曖昧な言葉なのだろう。そんな曖昧な言葉に左右される事なく、自分が正しいと思える行動をして行きたい。